◎旧朝香宮邸の歴史を訪ねて

連載◆第1回

Residence of Prince Asaka 1933—

東京都庭園美術館は昭和58年(1983年)に旧朝香宮邸の建物と庭園をそのまま美術館として開館しました。

朝香宮家は久邇宮家第8王子鳩彦(やすひこ)王が天皇の特旨により明治39年(1906年)に創立された宮家です。朝香宮鳩彦殿下は明治43年に明治天皇第8皇女允子(のぶこ)内親王とご結婚され、大正10年(1921年)に白金台の御料地約1万坪を賜りました。

当初、朝香宮家は高輪3丁目付近、現在の品川駅前のホテル・パシフィックの辺りにお住まいでしたが、大正12年の関東大震災で建物が損壊したため、昭和8年(1933年)、白金台にアール・デコ様式の新宮殿を建設されました。設計・監理は、赤坂離宮をはじめとする多くの宮邸建築を手がけた宮内省内匠寮(たくみりょう)工務課が行いました。朝香宮邸が他の宮邸と異なっていたのは、室内装飾をアール・デコの代表的フランス人デザイナー、アンリ・ラパンに依頼したことです。

アール・デコとは1925年のパリ万博で頂点を極めた装飾様式で、その名称は同博覧会の仏文名に由来します。時折しも1925年のアール・デコ博覧会が開催されていたパリに朝香宮同妃両殿下がご滞在中で、同博覧会を公式見学されたことがきっかけとなり、アール・デコ博で要職につき活躍したラパンに室内装飾を依頼したと考えられます。こうして世界的にも貴重なアール・デコ様式の建築が東京に出現したのです。朝香宮家の方々は昭和22年に皇籍離脱されるまで白金台の館にお住まいになりました。

戦後、旧朝香宮邸は様々な歴史を重ねていきます。昭和22年から29年までは吉田茂外務大臣のちに首相公邸として使用され、その間、昭和25年に土地と建物が西武鉄道の所有となり、昭和30年から赤坂迎賓館が改装される昭和49年まで国賓・公賓のための迎賓館としての役割を果たしました。昭和56年、土地と建物は東京都の所有となり、昭和58年10月1日、竣工から半世紀を経て、旧朝香宮邸は美術館としてその優美な扉を開きました。(高波) ◆

大客室(竣工当時)
窓から南面の庭園を望む大客室。華やかな室内のテーマは庭園と花です。旧朝香宮邸のなかでも最もアール・デコの粋を集約した部屋です。アンリ・ラパンが室内装飾を担当し、天井下の油彩画による壁画も彼の手によるものです。照明にはルネ・ラリック作のシャンデリア《ブカレスト》が2灯設置され、扉はマックス・アングランの銀引きフロスト仕上げによる装飾ガラスがはめ込まれています。扉の上の鉄製ティンパヌム(半円飾り)はレイモン・シュブの制作と推測されます。

イオニア式柱頭を持つ金茶のシコモール材の飾り柱、ジグザグ模様の天井レリーフ、そしてガラス、ブロンズ、カンヴァスなど様々な素材により展開される幾何学的な花模様など、すべての装飾にアール・デコの特徴が強く顕れています。

現在、竣工当時の大客室の家具は所在が不明ですが、室内にあわせてフランスからアール・デコの家具を輸入したと思われます。

ベランダ(竣工当時)
日当たりの良い2階南面に位置するベランダからは、芝生の庭園と日本庭園を見渡すことができます。設計は宮内省内匠寮です。イタリア産の黒と白の大理石と鋭角的な照明がシンプルでモダンな空間を作り出しています。